

学校生活に対する満足度と意欲が柔道整復師国家試験合否に及ぼす影響

大橋 淳¹⁾ 吉井健悟²⁾

- 1) 常葉大学健康プロデュース学部健康柔道整復学科
- 2) 京都府立医科大学大学院医学研究科生命基礎数理学

Effects of Satisfaction and Motivation in School Life on Outcomes of the National Judo Therapist Examination

Jun OHASHI, Kengo YOSHII

要 旨

【目的】学校生活に対する学生の満足感や充実感およびクラス集団がもつ雰囲気を選定する尺度と国家試験合否の関係を明らかにし、学生支援の方針を検討するための基礎資料を得ること。【方法】A 大学柔道整復学科に在籍する4年生61名を対象とし、2018年5月に学校生活満足度尺度および学校生活意欲尺度を集合調査にて実施した。49名（男性42名、女性7名）から得られたデータを国試合格群および不合格群、留年群に分け、この3群を目的変数とし、質問紙を構成する下位尺度8項目を説明変数としてANOVAを行った。有意差のみられた説明変数間の多重共線性の影響をピアソンの積率相関分析で検討し、多重ロジスティック回帰分析を行った。統計解析にはR version 3.4.3を用い、有意水準は5%とした。【結果】ANOVAで承認 ($p<0.05$)、教職員との関係 ($p<0.05$)、進路意識 ($p<0.01$) において有意差がみられた。相関分析で、承認はクラスとの関係の間に強い正の相関 ($r=0.81, p<0.05$) がみられ、教職員との関係は友人との関係の間に強い正の相関 ($r=0.77, p<0.05$) がみられた。国家試験合否を目的変数、下位尺度6項目を説明変数として多重ロジスティック回帰分析（強制投入法）を行った結果、オッズ比（95%信頼区間、有意確率）は進路意識で1.37（1.02-1.85、 $p<0.05$ ）であった。【考察】国家試験合格に結びつく有意な下位尺度として進路意識の得点の高さを同定でき、他の下位尺度も相互に関連して国家試験合否に影響していることがわかった。このことから、国家試験合格には学生個々が有する資格取得への高い価値が影響を及ぼすものの、普遍的な要因とはいえ、学校生活に対する満足度や意欲を構成する複数の要因のどれか1つが変化すれば、学校生活意欲のレベルが変わり、行動が変化する可能性が示唆される。

キーワード：学校生活満足度、学校生活意欲、国家試験合否、学生支援

Abstract

The objectives of this survey were to reveal a scale for measuring students' feelings of satisfaction and fulfillment with their school life and the atmosphere of their class groups and the relationship of these measures to outcomes (pass/fail) of the national examination as well as to obtain basic data for examining policies for student support. It was found that the maximum of the score for career consciousness was identifiable as a significant subscale linked to passing the national examination and other subscales also influenced outcomes on the national examination in relation to each other. This suggests that, although a high value placed by individual students on obtaining qualifications affects the passing of the national examination, this cannot be considered a universal factor, and if any one of several factors that constitute satisfaction or motivation with school life changes, the level of school life motivation may differ and behaviors may change.

Keywords : Satisfaction with School Life, School Motivation, National Examination pass/fail, Student Support

1. はじめに

柔道整復師国家試験（以下、国家試験）に向けた受験学力向上のひとつに学校のクラス作りが挙げられる。柔道整復師を養成する大学や専門学校（以下、養成校）は、入学から卒業までの3年あるいは4年間ほぼ固定されたメンバーで、同じ教室で共同体的な学校生活を送りながら専門知識と技術を学修していく。したがって、クラスの状態を良好にしなければ学修指導面と学生指導面が相乗的に悪化し、学力定着の低下並びに未修得単位の増加、結果的に退学率増加および国家試験合格率低下につながると考えられる。柔道整復師養成校の教員にとって、良好なクラス運営は喫緊の課題であるものの、教員個々の教育観に基づいた学生アセスメントによって指導管理が行われているのが現状である。そのため、学生個々やクラスの状態を客観的に把握し、悪化させない適切な指導管理が求められる。

現在、客観的な学生アセスメントをするために活用されている質問紙として、学校生活満足度尺度と学校生活意欲尺度があり、①学生個々の実態、②クラスの状態、③個人とクラスの関係の3点を同時に把握できることが特徴とされる¹⁾。学校生活満足度尺度は、学校生活における満足度を承認因子（クラスに居場所がある、充実感が得られている）と非侵害・不適応因子（クラスへの不適応感や孤立感をもっている、いじめや冷やかしのを受けている）の2つの下位尺度から測定するものである。この2因子の得点と全国平均値をもとに、学生を学校生活満足群、非承認群、侵害認知・不安定群、学校生活不満足群の4群に分類できる。一方、学校生活意欲尺度は、学校生活に対する意欲の高さについて6つの下位尺度（友人との関係、学習意欲、教職員との関係、学校の支援体制、進路意識、クラスとの関係）から測定するものである。これらを単独で、あるいは組み合わせることで、学生個人の不適応の早期発見、退学予防や、クラス状態に応じた授業の展開等に応用が可能とされる²⁾。小中高等学校においては毎年300万人以上が活用しているため豊富な知見があるが、大学や専門学校における具体的な報告は少ない。

柔道整復師教育においては、この学生アセスメントの指標と大学1年生の進級との関連を検討した報告³⁾があり、「進路意識」、「友人との関係」が進級に影響していることが示されている。この結果は、医療系大学1年生の入学目的や課題の存在は、「学業への取り組み」や「友人との関係」、「教員との関係」に正の影響を及ぼすという報告⁴⁾や取得できる資格と就職が結びついている学部の学生は「進学動機」と「友人関係」が学校適応感に影響を及ぼすという報告⁵⁾と一致しており、学生のクラス集団に対する居心地のレベルと学業成績との間に関連がある可能性を示唆する。クラスが居心地のよい場所になれば、その学生のクラス集団への適応感が高まり、

種々の学校生活に主体的に取り組む意欲につながり、それが国家試験にも効果的な影響を及ぼすと推測する。簡便かつ学生指導に応用が可能な学生アセスメントの指標を用い、学生の学校に対する満足度や意欲を測定し、国家試験合否との関係や合否に影響を及ぼす要因について検討することは、多様な背景を持つ学生に対する日常的な学生支援の方策についての示唆が得られる可能性がある。

そこで本調査では、学校生活満足度尺度、学校生活意欲尺度と国家試験合否の関係を明らかにし、学校生活に対する満足度を高め、意欲低下を引き起こさないための学生指導の方針を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

なお、本調査で用いる学校生活満足度尺度、学校生活意欲尺度は、以下のことから hyper-QU 大学版ではなく hyper-QU 専門学校版を用いることとする。1) 大学版は総合大学を想定した質問内容となっているため、進学目的がはっきりしていると考えられる医療系大学の学生には専門学校版の質問の方が適していること、2) 柔道整復師学校養成施設指定規則⁶⁾において、最低履修時間数（2750時間以上）および総単位数（99単位以上）が設定されており、大学と専門学校の教育内容に大きな違いがないこと、3) 全国柔道整復師養成施設の85%以上を専門学校が占めている状況で、本調査結果の汎用性を評価していく必要があること。

2. 方法

2.1 調査対象

関西圏内の医療系私立 A 大学柔道整復学科の2018年度4年生61名（男性54名、女性7名）を対象とした。

2.2 調査時期

調査は2018年5月に実施した。

2.3 調査方法

4年生へ進級してから1か月程度経過した時点で、教育課程外で実施した国家試験対策講座（自由参加）に出席した49名（男性42名、女性7名）に対し、講義終了後に質問紙を配布し、学生の協力と同意を得て、記名自記式で集合調査を実施した。

2.4 調査内容

hyper-QU（専門学校版）を構成する「学校生活満足度尺度（30項目）」および「学校生活意欲尺度（30項目）」について、「5：とてもそう思う」から「1：まったくそう思わない」までの5件法で回答を求めた。有効回答数は49名（100%）であった。

2.5 統計解析

49名から得られたデータを、2019年3月の国家試験成績と学生異動情報をもとに、合格群(25名)および不合格群(13名)、留年群(11名)に分類し、この3群と学校生活満足度の得点によって分類された4群(学校生活満足群、非承認群、侵害認知・不安定群、学校生活不満足群)との頻度の比較にフィッシャーの正確確率検定、学校生活満足度尺度の4群と国家試験の点数との平均値の比較にはKruskal-Wallis検定を行った。

次いで、国家試験成績3群を目的変数とし、学校生活満足度尺度の下位尺度(承認、被侵害・不適応)および学校生活意欲尺度の下位尺度(友人との関係、学習意欲、教職員との関係、学校の支援体制、進路意識、クラスとの関係)を説明変数として一元配置分散分析、事後解析としてTukey-Kramerの方法による多重比較検定を行った。有意差のみられた説明変数間の多重共線性の影響について検討をするため、ピアソンの積率相関分析を行った。相関分析の結果をもとに、多重ロジスティック回帰分析を行い、オッズ比を算出した。

なお、統計解析にはR version 3.4.3を用い、有意水準は5%とした。

2.6 倫理的配慮

本調査はA大学研究倫理委員会の承認(承認番号1704201)を得て実施した。対象者には本調査の目的、調査協力の拒否が可能なこと、学業成績とは無関係であること、個人の調査結果の秘密が守られること、調査結果を研究目的以外で公表しないことを口頭で説明し、質問紙の提出をもって同意するとみなすことに合意した。

3. 結果

3.1 学校生活満足度の4群と国家試験成績との関連

合格群では学校生活満足群が13名(26.5%)、侵害認知・不安定群が7名(14.3%)、非承認群が3名(6.1%)、学校生活不満足群が2名(4.1%)であり、不合格群では学校生活満足群が1名(2.0%)、侵害認知・不安定群が5名(10.2%)、非承認群が2名(4.1%)、学校生活不満足群が5名(10.2%)であり、留年群では、学校生活満足群が1名(2.0%)、侵害認知・不安定群が4名(8.2%)、非承認群が0名(0.0%)、学校生活不満足群が6名(12.2%)であった(表1)。フィッシャー正確確率検定で有意差($p=0.005$)がみられたが、学校生活満足度の4群における国家試験点数の比較では、有意差($p=0.070$)はみられなかった(図1)。

3.2 下位尺度8項目間の3群間比較

「承認($p<0.05$)」、「教職員との関係($p<0.05$)」、「進路意識($p<0.01$)」において有意差がみられたため、Tukey法による多重比較を行った(表2)。「承認」、「進

路意識」において合格群が不合格群よりも得点が有意に高かった(それぞれ、 $p=0.011$ 、 $p=0.006$)。「教職員との関係」では合格群が留年群よりも得点が有意に高かった($p=0.017$)。

3.3 下位尺度間の相関関係

「承認」は「クラスとの関係」との間に強い正の相関($r=0.81$ 、 $p<0.05$)がみられ、「教職員との関係」は「友人との関係」との間に強い正の相関($r=0.77$ 、 $p<0.05$)がみられた。その他の説明変数間には $r\geq 0.7$ となるものはなかった(表3)。

3.4 下位尺度得点と国家試験合格のロジスティック回帰分析

表3をもとに説明変数間の多重共線性の影響を検討した結果、「クラスとの関係」と「友人との関係」を分析対象から除外し、国家試験合否を目的変数、「承認」「被侵害・不適応」「学習意欲」「教職員との関係」「学校の支援体制」「進路意識」の6項目を説明変数として多重ロジスティック回帰分析を行った。強制投入法により得た有意な説明変数は「進路意識」であり、オッズ比(95%信頼区間、有意確率)は1.37(1.02-1.85、 $p<0.05$)で有意に寄与した。その他の下位尺度では有意なオッズ比はみられなかった(表4)。

表1 学校生活満足度と国家試験成績との関連

	合格群 (n=25)	不合格群 (n=13)	留年群 (n=11)
学校生活満足群	13	1	1
侵害認知・不安定群	7	5	4
非承認群	3	2	0
学校生活不満足群	2	5	6

フィッシャー正確確率検定 $p=0.005$

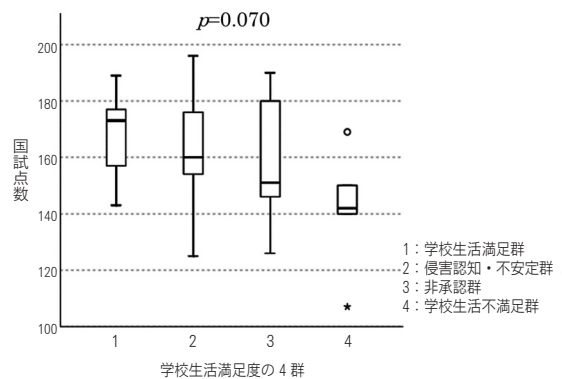


図1 国家試験点数の4群間比較

表2 下位尺度得点の平均値(標準偏差)と分散分析結果

	1. 合格群 (n=25)	2. 不合格群 (n=13)	3. 留年群 (n=11)	p値	多重比較
承認	55.36 (12.23)	42.00 (13.27)	48.45 (12.34)	0.011 *	1>2
被侵害・不適応	32.28 (21.00)	36.69 (14.55)	42.27 (12.90)	0.306	
友人との関係	23.64 (3.15)	21.00 (3.15)	21.18 (4.19)	0.061	
学習意欲	20.44 (4.27)	18.08 (2.75)	17.91 (4.19)	0.101	
教職員との関係	21.92 (3.35)	19.00 (3.54)	18.09 (5.52)	0.017 *	1>3
学校の支援体制	17.28 (4.03)	14.62 (4.39)	17.09 (4.72)	0.180	
進路意識	21.36 (3.76)	17.07 (3.77)	19.09 (3.62)	0.006 **	1>2
クラスとの関係	19.04 (3.74)	15.62 (5.11)	17.55 (4.99)	0.086	

値は平均(標準偏差)を示す * : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$

表3 下位尺度得点の相関係数

	被侵害・不適応	友人との関係	学習意欲	教職員との関係	学校の支援体制	進路意識	クラスとの関係
承認	0.11	0.53 *	0.53 *	0.64 *	0.68 *	0.44 *	0.81 *
被侵害・不適応		-0.20	-0.02	-0.08	0.07	-0.07	0.09
友人との関係			0.65 *	0.77 *	0.33 *	0.38 *	0.63 *
学習意欲				0.68 *	0.48 *	0.54 *	0.58 *
教職員との関係					0.38 *	0.37 *	0.67 *
学校の支援体制						0.47 *	0.69 *
進路意識							0.37 *

* : $p < 0.05$

表4 下位尺度得点と国家試験合格のロジスティック回帰分析結果

変数	オッズ比 (95%信頼区間)	p値
承認	1.06 (0.94-1.21)	0.239
被侵害・不適応	0.98 (0.93-1.03)	0.414
学習意欲	0.83 (0.56-1.22)	0.284
教職員との関係	1.26 (0.82-1.95)	0.253
学校の支援体制	0.98 (0.72-1.32)	0.861
進路意識	1.37 (1.02-1.85)	0.037 *

* : $p < 0.05$

4. 考察

4.1 国家試験成績との関連

学校生活満足度の4群と国家試験成績との関連を検討した結果、学校生活満足度と国家試験成績は関連していることがわかった。学校生活満足群と学校生活不満足群との間に統計学的な有意差はみられなかったが、今後、サンプルサイズを増やし検討していきたい。

下位尺度得点の群間比較では、不合格群は合格群に比して「承認」、「進路意識」の得点が有意に低く、「学校の支援体制」、「クラスとの関係」の得点も低いことから、自分の進路について悩みを抱えているのだが、自分なりの価値観や行動が周囲に認められていないと感じている。そのため、クラスへの適応感が低下し、学校が用意しているサポート体制の活用にも抵抗があることを示唆する。一方、留年群は合格群に比し、「教職員との関係」の得点が有意に低く、「被侵害・不適応」の得点が高かった。留年群は学業面において周囲より遅れていることから教員に対して引け目を感じ、それが教職員から受容されていない感覚となり、教職員に対する信頼感の低下につながっているのではと推察する。

4.2 下位尺度間の相関関係

下位尺度間の相関をみると、「承認」と「クラスとの関係」に0.81、「友人との関係」と「教職員との関係」に0.77の強い正の相関がみられる。学校における対人関係の対象である友人や教職員に自身を開示して親和的

な関係を築くことが、クラスで安心して自分らしさを出せている感覚となり、自分らしく振舞うことができることを示唆する。また、多くの項目間に中等度の正の相関がみられることから、それぞれの下位尺度が相互に関連していることがわかる。

4.3 国家試験合格に影響を及ぼす要因

学校生活満足度尺度および学校生活意欲尺度と国家試験合格との関係について調査し、国家試験合格に影響を及ぼす下位尺度を検討した。結果、合格に結びつく有意な下位尺度として進路意識の得点の高さを同定した。また、進路意識は承認、友人との関係、学習意欲、教職員との関係、学校の支援体制、クラスとの関係と正の相関がみられることから、それぞれの下位尺度が国家試験合格に相互に関連していることが推察できる。このことから、以下の解釈ができる。1) 卒業後のビジョンが明確であるからこそ柔道整復師の資格取得(個人の目標達成)に向けて高い価値を見出すものである。自分にとって価値のある高い目標は学習意欲の向上につながる。2) 同じ目的意識を持った集団の一員として、自分の存在や行動が他者から承認を得られ、親和的な関係を築くことは、さまざまな学校生活意欲と関連している。3) 学校や教職員が協力的であることは就職や国家試験合格への期待につながり、クラスやグループにおけるポジティブな雰囲気醸成することにも効果的な影響を与えている可能性がある。

以上のことから、国家試験合格には学生個々が有する個人の目標達成が正の影響を及ぼすものの、普遍的な要因とはいえず、学校生活に対する満足度や意欲を構成する複数の要因のどれか1つが変化すれば、学校生活意欲のレベルが変わり、行動が変化する可能性が示唆される。

5. おわりに

学校生活満足度尺度、学校生活意欲尺度と国家試験合格との関係を検討した結果、明確な進路意識が国家試験合格に影響を及ぼすこと、学校生活に対する満足度や意欲を構成する複数の要因が相互に関連していることがわかった。このことは、学校と教職員がどれか1つの要因でも軽視したならば、学生の学校生活意欲が大きく下がり、進路意識の低下に影響を与える可能性があることを示唆する。すなわち、学校や教職員による学生支援が国家試験合格に果たす役割は大きいという前提のもと、日々の教育に携わる必要がある。

文 献

- 1) 河村茂雄「生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1)」『カウンセリング研究』32号、1999、274-282
- 2) 河村茂雄『専門学校のための hyper-QU ガイド』図書文化社、東京、2011
- 3) 大橋 淳、吉井健悟「hyper-QU からみた大学1年生の進級に影響する要因」『第27回日本柔道整復接骨医学学術大会抄録集』2018、134
- 4) 榎本光邦「医療系大学における新入生の大学適応感に及ぼす大学生生活要因の影響」『群馬パース大学紀要』21号、2016、5-15
- 5) 磯部有希、上村佳世子「大学への進学動機と学校適応感との関連」『文京学院大学人間学部研究紀要』9巻1号、2007、51-61
- 6) 文部科学省・厚生労働省「柔道整復師学校養成施設指定規則の一部を改正する省令について」(2017)
https://www.judo-seifuku.or.jp/wp/wp-content/uploads/2019/03/h29_rule_revision.pdf#search.
[accessed 2019-06-21]